

心血管造影より、左上肺静脈が無名静脈へ還流する部分肺静脈還流異常症の合併が確認された。コントラストエコーで、右肺静脈は副心房に還流することも確認された。3月16日、左開胸で左上肺静脈-左房吻合を行い、8月31日、正中切開で三心房修復術を行った。術中、Unroofed coronary sinus の存在が確認され、副心房へ還流していたため、ASD と共にパッチ閉鎖し、冠静脈血は左房へ誘導した。副心房の存在、肺静脈の還流部位の確認には、コントラストエコーが有用であったが、本症には肺静脈等の奇形を伴う事も多く、術前、術中の慎重な検索が必要である。

24) TGA に対する Arterial Switch Operation 術後の問題点

金沢 宏・山崎 芳彦 (新潟市民病院)
 建部 祥・清水 孝王 (心臓血管外科)
 青木英一郎・桜井 淑史 (呼吸器外科)

1993年4月から1994年11月までに TGA (I) 3例、TGA (II) 2例に対し Arterial Switch Operation を施行した。手術時日令10日~46日、体重 2.5~3.8kg。TGA (II) の1例が第1病日 hypoxia で死亡した。耐術例では TGA (I) の1例が両側肺動脈の狭窄を、1例が主肺動脈の吻合部での高度狭窄を示し、Balloon 拡大術を必要とした。主肺動脈吻合部での拡大効果は得られず、経過観察している。TGA (II) の1例は multiple VSD で muscular VSD が遺残 (Q_F/Q_S=1.3)、LA の拡大と前方からの A₀ の圧迫により左主気管支狭窄を示したが、3カ月後 A₀ 取り付け術を施行しその後の経過は良好であった。

術後の肺動脈狭窄、気管支狭窄などひきつづき慎重な経過観察が必要と思われた。

25) 食道抜去術に際し気管膜様部を損傷した食道表在癌の1例

鹿嶋 雄治・佐藤 謙一郎
 瀧井 康公・林 達彦 (秋田組合総合病院)
 湯口 卓 (外科)
 土田 昌一 (秋田赤十字病院)
 宗岡 克樹 (新潟大学第一外科)
 (心臓血管呼吸器外科)

食道表在癌に対する食道抜去術にさいし、気管膜様部を損傷し、遊離心膜にて修復を行い、良好な術後経過をたどった症例を経験したので報告する。

症例は69歳の男性で、胃癌術後のフォローアップで内視鏡検査を行ったところ胸部中部食道に 0-IIc 型の表在癌をみとめ平成6年6月16日食道抜去術を施行した。抜去直後より air leak を認めたため術中気管支ファイバーを行い左主気管支の膜様部損傷を確認した。右開胸下に 3cm 大の損傷部を遊離心膜をもちいて閉鎖した。術後2週目まで人工呼吸器による呼吸管理を行い、大きな合併症なく退院した。

この症例を文献的考察をくわえて報告する。

26) 進行食道癌に対する術前化学療法

柴尾 和徳・中村 茂樹
 宮下 薫・大黒 善弥 (燕労災病院外科)
 藍沢喜久雄 (新潟大学第一外科)

【目的】我々は進行食道癌に対する化学療法で良好な治療成績を収めたので報告する。【対象と方法】1993年12月から1994年7月までに当科で経験した進行食道癌5例。占拠部位は、Im 2例、Ei 3例だった。術前化学療法として CDDP 60~70mg/m² iv, 5FU 500~750 mg/m² × 5日 div, ロイコポリン 20 mg/m² × 5日 iv を2~5クール施行した。このうち3例に切除術を行い、非手術は2例 (A₃ 1例、低心機能1例) だった。【結果】奏効度 CR; 0例, PR; 3例, NC (MR); 1例, PD; 1例で奏効率は60% (3/5) だった。副作用として軽度の白血球低下、食欲不振、吐気、口腔内アフタ、脱毛が認められた。【結語】CDDP, 5FU, LV による化学療法は有効だった。

27) 早期胃癌に対する大網温存幽門側胃切除術の検討

鈴木 晋・杉本不二雄
 吉田 正弘・斎藤 六温 (刈羽郡総合病院)
 関矢 忠愛 (外科)

当院では1987年よりA、M領域の早期胃癌に対し、術後のQOLの向上を目的とした大網温存幽門側胃切除術を行っておりその数は120例をこえた。

そこで今回大網温存術と従来の大網切除術で、予後、手術時間、出血量、入院期間、術後の合併症、愁訴につき比較検討した。

両術式で、5生率に差はみられなかった。大網温存術は非温存術に比し出血量が少なく、手術時間が短かった。大網温存術では腹痛をはじめとする術後(退院後)の愁

訴が少なく、術後の QOL の向上に有用であった。リンパ節転移程度からすると、大網温存術はA領域の早期胃癌には適応できるがM領域の早期胃癌に対してはさらに検討を要する。

28) 2群リンパ節転移を伴った大腸腺腫内癌の1例

角南 栄二・伊賀 芳朗 (厚生連村上総合病院外科)
村山 裕一・清水 春夫 (新潟大学第一外科)
岡田 貴幸・飯合 恒夫 (新潟大学第一外科)

今回我々は2群リンパ節転移を伴った大腸腺腫内癌の1例を経験したので報告する。症例は67歳男性。大腸癌検診で異常を指摘され注腸及び大腸内視鏡検査にて盲腸にI型進行癌、S状結腸にφ6mmのIIa癌、上部直腸にφ3mmのIIa癌を各々認めた。S状結腸及び上部直腸の腫瘍は内視鏡的に切除し、病理組織学的にいずれも腺腫内m癌であった。後日盲腸I型進行癌に対し3群リンパ節郭清を伴う右半結腸切除術を施行した際、触診にて直腸傍及び下腸間膜動脈リンパ節の腫脹硬化を認めたため、3群リンパ節郭清を伴う低位前方切除術を付加した。病理組織学的にも2群リンパ節の転移陽性を認めた。盲腸I型進行癌は深達度ssで、所属リンパ節に転移を認めなかった。

29) 新潟県における高齢者胃癌の現状

佐々木 壽英・佐野 宗明
梨本 篤・筒井 光廣
土屋 喜昭・牧野 春彦 (新潟県立がんセンター外科)
田中 乙雄

昭和47年から平成2年まで19年間にわたって、新潟県の胃癌手術例調査を行ってきた。この間、県内症例として30,378例の登録数を数え、98%という高い登録率が得られた。ご協力に心から感謝する。胃癌手術例は昭和47年の1,273例から昭和61年の2,590例まで増加し、以後横這いである。本調査の最終報告として、胃癌の高危険群である高齢者胃癌の現状について述べる。手術例の増加が最も著しいのは70歳代であり、平成2年には675例を数え、昭和47年の4倍以上に増加した。70歳代の早期胃癌率、切除率の推移などについて述べ、今後の高齢者胃癌対策について検討を加える。

平成3年から新潟県の地域がん登録が開始されたため、この胃癌手術例調査は地域がん登録に移行することとした。地域がん登録における胃癌手術例登録数は平成3年

1,473例、4年1,659例である。胃癌手術例で約800例から1,000例の未登録症例があるものと推定される。地域がん登録へのご協力をお願いする。

30) 带状疱疹合併消化器癌の検討

星山 圭鉉 (柏崎中央病院外科)
星山 真理 (同 内科)
武藤 一朗・鈴木 茂 (新潟大学第一外科)

带状疱疹の発症は細胞性免疫機能の低下がウィルス(Uaricella Zoster Virus)の再活動の原因となっていると考えられ、しばしば内臓の悪性腫瘍を合併すると報告されている。最近では抗ウィルス剤、ソリブジンとフルオロウラシル系抗癌剤の併用による副作用で死亡例が報告され、社会問題となったことはよく知られたことである。

われわれは過去10年間に带状疱疹を合併した消化器悪性腫瘍症例を検討したので報告する。10年間の带状疱疹例は約230例あり、うち消化器疾患は胃癌5例、大腸癌2例、胆石症2例である。带状疱疹と胃癌の並存率は2.2%、大腸癌は0.9%、また胃癌の带状疱疹合併症は3.3%、大腸癌は1.5%であった。これらの症例につき、種々検討を加えたので報告する。

31) 気圧と虫垂炎

福田 稔・大竹 雅広 (県立坂町病院外科)

平成4年2月より平成6年2月迄に112例の虫垂炎を経験した。これら症例について、気圧と虫垂炎発生の関係を調査した結果について報告する。

32) 当院赴任後5年間における手術例の検討 —手術成績を中心に—

川口 英弘・三間智恵子 (巻町国民健康保険病院外科)

過去5年間に当院で経験した入院手術例は834例であり、その内訳(一部重複)は胃癌144例、大腸癌94例、肝・胆・膵腫瘍40例、乳癌24例、甲状腺癌5例、胆石症(胆管結石症、肝内結石症を含む)130例、急性虫垂炎84例、鼠径ヘルニア128例、痔疾患66例、イレウス19例、胃潰瘍12例、大腿ヘルニア11例、その他93例である。胃癌全症例の5生率は67%で、70歳未満では80%であるのに対し、70歳以上では55%と成績不良であった(p=